

霊宝館だより

霊宝館だより 第82号

平成19年3月1日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

<http://www.reihokan.or.jp>



奥の院参道の石仏（萱野家墓所近くにて）

霊宝館予定

春期企画展

「染織の美」

4月28日（土）～7月8日（日）

第28回大宝蔵展

「信仰マンダラの世界高野山

―神仏への祈り―」

7月14日（土）～9月9日（日）

秋期企画展

「仏に祈りをこめた法具」

9月15日（土）～12月9日（日）

現在平常展開催中

4月22日（日）まで

連載

高野山の名鐘

其の5

持明院の梵鐘

霊宝館副館長 井筒 信隆



珍しい旗挿しの貴重な姿

戦国時代に生きた悲運の女性として良く知られている織田信長の妹「お市の方」の有名な肖像画が伝わる持明院の境内に、明治四十二年に建立された鐘楼がある。その鐘楼にかかる梵鐘は、私たちが一般に良く目にする梵鐘の姿に比べ、大変変わった特徴を持っている。

その特徴とは、釣り鐘を釣り下げるために設けられている上部笠形の龍頭の横に装飾された筒状の突起の筒が設けられている点にある。坪井良平氏も、『高野山の梵鐘』の中で、この持明院に伝わる梵鐘は、江戸時代には往生院に伝わり、明治期に持明院に移り伝わることになったことから、この梵鐘を、「往生院阿弥陀堂鐘」として紹介されている。次に、坪井氏の紹介の記述をもとに、持明院に伝わるこの梵鐘の概略を紹介したい。

同氏はこの梵鐘の特徴である笠

形状の筒について、朝鮮鐘にはあるが普通の和鐘にはない特色のあるものである。朝鮮鐘では「旗挿し」と称されるものである。もとは、中国古銅器の鐘における「甬」というもので、李朝時代以前の朝鮮鐘には殆ど例外なく表されているものである。日本の和鐘の釣鐘



持明院鐘楼

では龍頭が左右に表される双頭であるが、朝鮮鐘の龍頭は単頭で、もう一方の龍頭にあたるところに旗挿と称する筒を連結させて吊るように造られている。

わが国には南北朝時代以降、朝鮮鐘が輸入されるものが多くなるにつれ室町時代の中頃から九州の地で旗挿しの筒の模倣を始め、桃

山時代の天正・慶長の頃に中国地方の備後三原の鑄工らが形状をまね、江戸時代には主に京都市の鑄物師が盛んに旗挿しを表す朝鮮鐘の模倣をおこなった。また、和鐘と朝鮮鐘の折衷形式の釣鐘を鑄造するようになった。

この持明院の梵鐘にみられるごとく、形状が和鐘にもとづく姿に



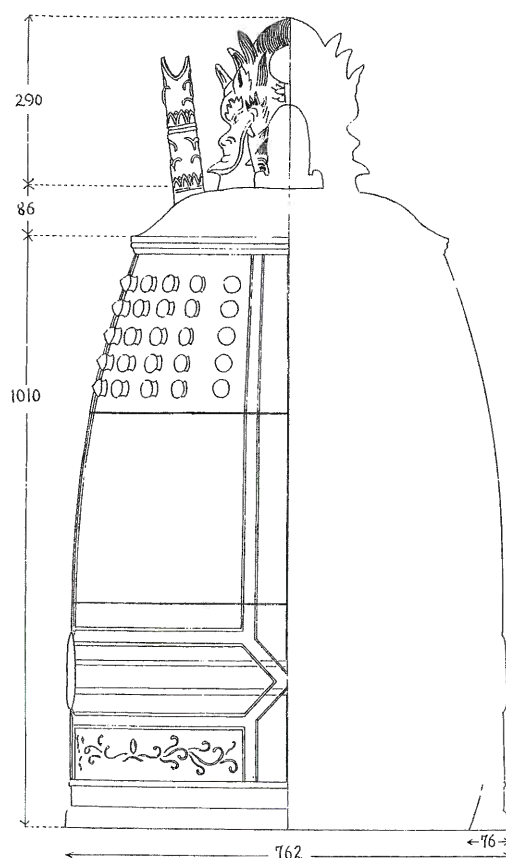
龍頭と旗挿し部分

よって作られているが、笠形に旗挿しの筒を付加しているのは、江戸時代の折衷形式の流行によるものと考えられ興味深い作品である。また、珍しい旗挿しの筒には、音響の調節に役立つものであるとする意見があり、高野山においても「黄鐘調の鐘として声明家の珍重する鐘である」とする意見もあり、この筒を音管と称する人もある。しかし、音響学者によると、この筒の有無は鐘の発する音響に何等影響がないとすると説明を加えている。

鐘の池の間には、南紀金剛峯寺往生院には行基によって彫られた

ありがたい無量寿仏(阿弥陀如来)を本尊として祀る阿弥陀堂がある。この阿弥陀堂や本尊に傷みがみられるので修復をおこなった。あわせて失われていた鐘楼の新築と梵鐘の再鑄を行った旨を記す寛文元年(一六六一)の沙門宥延の銘と、持明院の境内に京都市五条の住人の高橋弥七と弥一郎によって明治四十二年秋に鐘楼が寄進された旨の追刻銘があることを紹介されている。

高野山の梵鐘のなかで、唯一、朝鮮鐘の旗挿しを模倣した形状の筒が上部笠形に表現されている貴重な姿の梵鐘である。



高野山の文化

(一) 巡寺八幡について その二

(5) 軸の種類と所在

前編では(一)三社の託宣について、(二)軸面の構成、とに分けて述べた。その中で、私の今まで調べた三神像と三社の託宣関係資料(軸装)を紹介した。しかし、その種類と所在地とが分りにくいので、もう一度まとめ直しておく、次のようになる。

三神像と三社の託宣

- ① 高野山山陰家旧蔵 (高野町)
- ② 天野神田地区所蔵 (かつらぎ町)
- ③ 西富貴 (扇本武氏所蔵) (高野町)
- 三神名と三社の託宣
- ④ 高野山無量光院所蔵 (高野町)
- ⑤ 東細川地区日待講所蔵 (高野町)
- ⑥ 西富貴 (扇本氏所蔵) (高野町)
- ⑦ 新子 (尾上角兵衛氏所蔵) (旧・花園村)
- ⑧ 黒河 (福井貴雄氏所蔵) (九度山町)
- ⑨ 慈尊院安賀箱日待講所蔵 (九度山町)
- ⑩ 同西箱同講所蔵 (九度山町)
- ⑪ 同中箱同講所蔵 (九度山町)

- ⑫ 入郷地区所蔵 (九度山町)
- ⑬ 巡寺八幡講 (高野町)
- 三神像と高野明神・弘法大師像
- ⑭ 高野山親王院所蔵 (高野町)
- 三神名と三神像
- ⑮ 丹生川地区 (九度山町)
- ⑯ 東細川 (新谷喜代子氏所蔵) (高野町)
- ⑰ 丹生川 (和田家所蔵) (九度山町)

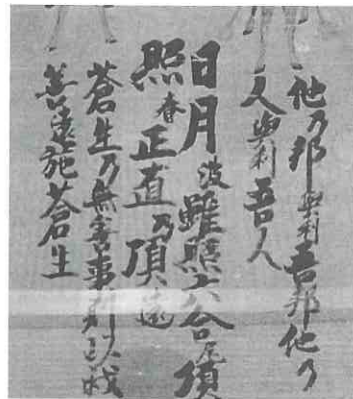
そこで、今回は、託宣に書かれている内容と、その意味について見てみたい。ここでは①・⑨・⑬について解説することにする。

(三) 三社の託宣

(1) ①高野山山陰家旧蔵の軸にある三社の託宣は、全体が簡略な文である。

① 山陰家旧蔵本
八幡大菩薩
他ノ邦ヨリ吾ガ邦、他ノ人ヨリ吾ガ人

奥之院維那 日野西 眞定



①山陰家旧蔵本託宣部分

天照皇太神宮

日月ハ六合ヲ照スト雖モ、頂ヲ照スハ

正直ノ頂ト

春日大明神

蒼生ノ善事ナケレバ、即チ我カ善ヲ以

テ蒼生ニ施サント

(2) ⑬巡寺八幡講の託宣について
これが江戸時代に於ては、高野山では一番基本となったと考えられるので、先ずこれを解説する。

⑬巡寺八幡講本
八幡

鉄丸雖^ヲ為^モ食、不^レ受^ケ心穢^ノ人ノ物^ヲ
銅炎雖^レ為^モ座、不^レ到^ラ心濁^ノ人ノ処^ニ

伊勢

春日

謀計雖^{シテ}為^モ「眼前ノ利潤」、必^ズ当^ル「神明ノ罰」
正直雖^{ナレ}非^モ「旦」依怙、終^ニ蒙^ル「日月ノ憐」
雖^モ曳^{クト}「千日注連」、不^ラ到^ラ「邪見ノ家」
雖^モ為^レ「重複深厚」、必^ズ赴^ク「慈悲ノ室」

これは原文であるが、書き下すと次のようになる。この三社の託宣に関心を持つ人は多いが、漢文が読みにくいので、二重になるが、一般読者のために手数を惜しまずに行き度いと思う。

⑬巡寺八幡講本 読み下し

八幡

鉄丸ヲ食スト雖モ、心穢ノ人ノ物ヲ受ケズ、銅炎ニ座スト雖モ、心濁ノ人ノ処ニ到ラズ

伊勢

謀計シテ、眼前ノ利潤ヲ爲スト雖モ、必ズ神明ノ罰当ル、正直ナレバ、一旦ノ依怙非ズト雖モ、終ニハ日月ノ憐ヲ蒙ル

春日

千日注連ヲ曳クト雖モ、邪見ノ家ニハ到ラズ、重複深厚爲リト雖モ、必ズ慈悲ノ室ニ赴クベシ

この文が一般的に流布しているものであるが、「鉄丸」を「銅焰」とし、二行ともにこの文句を使う系統もある。⑨ 慈尊院安賀箱の軸がそうである。次にこれを紹介する。

⑨ 慈尊院安賀箱本

八幡大菩薩

銅焰ヲ食スト雖モ、心穢ノ人ノ物ヲ受ケズ、銅焰ニ座スト雖モ、心濁ノ人ノ処ニ到ラズ

天照皇太神宮

謀計シテ、眼前ノ利潤ヲ爲スト雖モ、必ズ神明ノ罰当ル、正直ナレバ、一旦ノ依怙非ズト雖モ、終ニハ日月ノ憐ヲ蒙ル

春日大明神

千日注連ヲ曳クト雖モ、邪見ノ家ニハ到ラズ、重複深厚爲リト雖モ、慈悲ノ室ニ赴ク可シ

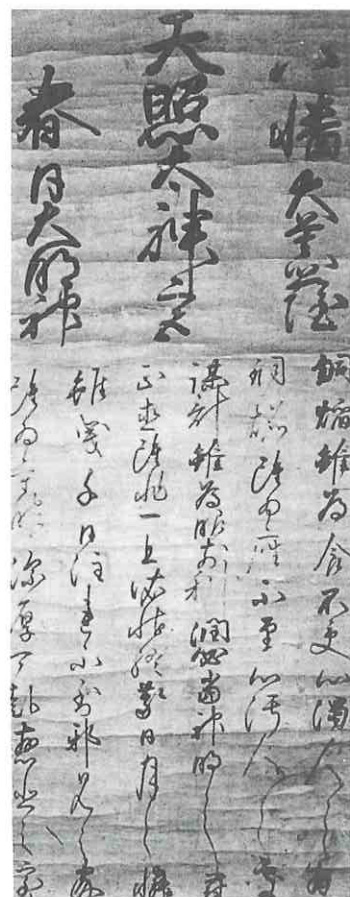
また護持院隆光筆のも同文である。僧隆光（一六四九〜一七二四）は、徳

川綱吉に生類憐れみの令を進言したほどの新義真言宗の高僧である。この人が書くほどであるから、一つの流れとして有ったと考えられる。

考えてみると、巡寺八幡講のも、この流れに入る。但し「銅焰」を「銅炎」としている。これは、行人方が後陽成院（一五七二〜一六一七）に願って書いて戴いたものである。従ってそれまでは古い託宣が使われていたと考えられるが、それが或いは旧山陰家蔵本ではなかったかと思われるのである。

なお、この「鉄丸」を「銅焰」としているのは、「銅焰（銅炎）」が二度も出て来、途中で書き誤ってこの系統が流布したように思われる。

文章の意味は、読み下し文にしているので、大体分かると思うが、「春日大明神」のは理解しにくいように思うので、説明を加える。「千日注連ヲ曳クト雖モ」は、常に注連を張って神聖な所としても、「邪見ノ家ニハ到



⑨ 慈尊院安賀箱本

⑬ 巡寺八幡講本

(四) 三社の託宣の発生と歴史

慶安三年（一五六〇）に、吉田系の神官によって書かれた『三社託宣抄』がある。これに「三社の託宣」は、正応年中（一二八八〜九三）に、奈良東大寺の東南院聖珍親王の代、庭の池の中にこの文句が浮かんだ、とある。東南院は、奈良に於いては真言宗の本拠であった。それで、この託宣の起こりには、同宗の僧がかかわりをもっている

ことが分かる。

しかし江戸時代には、この世を正しくするために、今度は「吉田ノ神主ニノリウツリ給ヒテ、心ヲ知ヤスク、言葉ヲヤハラゲテ、三社ノ神、各ノ各ノ託宣シ玉フト也」とある。吉田神社の中に「託宣ノ宮」もあったというので、ここを本拠として、同時代には、神主がこれを唱道している。そのために「天下悉ク此文字ヲ寫シ用ル者ナリ」とある。

『御湯殿上日記』延徳元年（一四八九）八月二十一日の条に、後土御門天皇が「三しゃのたくせん、かねともの卿にくやう（供養）の事おほせらる」とある。室町時代後期には、上級社会でこれが祀られていることが分かる。勿論、この時代のものは、①山陰家旧蔵にある文言のものと思われる。

これが江戸時代になると、庶民の中に、吉田家神主により、再託宣されて弘まった。その流れが、高野山及びそ



②天野神田地区所蔵本部分

の周辺に及んでいる。勿論、その中心になったのは高野山人の方の僧で、その唱導によるものである。

元来、正月にどの軸を掛けなければならぬ、という決まりはない。特に、日待には決まった神はない。もともとこの行事は一月十四日に多く、明けて十五日は「古正月」ともいい、陰暦時代には今の正月一日にあたる日であった。これを迎えるためのお籠りの行事であった。

但馬地方では、真言宗の僧侶が「日」の字から、大日如来と関係あるとし、この尊を祀ることが多い。高野山周辺は高野の僧達により、三社の託宣を使うことが弘められたのである。

「三社」といえば、世間一般では、伊勢・清水社・賀茂神社か、伊勢・八幡・春日であるという(小学館『日

本国語大辞典』。真言宗でも『弥勒中檀秘法』の次第には、神分に「天照太神・八幡・春日」が、日本を代表する神とある。この信仰の流れが「三社の託宣」を生んだのである。

但し、高野山では、弘法大師空海の家が祀っていた氏神が「佐伯八幡」であったことから、「八幡」といえば、同尊であると解釈するという、独自の立場がとられたのである。この神は現在でも普通寺で祀られている。この点については、後で詳しく説明する。

(五) 付記

平成十五年一月、仙台市中央市民センターの熊谷幹男氏から、氏が調査した「三社の託宣」についての資料を送ってくださった。氏が高野山大学図書館に、この研究について問合せたのに対し、『天野の文化と民俗』(二〇〇一第一号)に書いた拙論の存在を知らせたからであった。

同氏の資料によると、この託宣を、その内容から、

- (1) 「堪忍正直型託宣文」(二点)
 - (2) 「鉄丸型託宣文」(七点)
 - (3) 「堪忍正直型説明書」(一点)
- に分け、計十点を紹介して下さっている。

る。

(2) は巡寺八幡所蔵軸と同じ系統に入り、これが全国的にも一番広がっていると考えられる。

十点の内、一つは所在が不明であるが、残る九点の存在は、宮城県八・岩手県一で、仙台市のある宮城県に集中しており、時代的には、江戸時代初期から明治時代に及んでいる。その中には、葉山神社・曹洞宗永蔵寺・浄土宗補陀院があり、真言宗寺院は見当たらない。仙台市個人所有のものは、「東大寺東南院(以下不明)」と、この託宣のルーツを記したものである。

各託宣文を紹介すると、(1)には、上段八幡大菩薩・天照皇太神・春日大明神、その各神の下に、「正直者一生之重宝・堪忍者一生之相統・慈悲者一生之祈祷」とある。これは「正直ハ一生ノ重宝・堪忍ハ一生ノ相統・慈悲ハ一生ノ祈祷」と読める(仙台市個人所有)。

もう一つには、上段「八幡大神・天照太神・春日大明神」、その下段に、「堪忍一生相統・正直一生之宝・慈悲一生祈祷」と同文であるが順序が異なり、正直の項目だけは字数を六字にするために「之」の字を入れている。読み方は前の軸と同一である。作者には「大瀧山知足敬書」とある。熊谷氏の話に

によると、「木食知足(文政十一年(一八二八)寂)」とある。木食とは、五穀を断つ行をすることで、修験的傾向の行者といえる。

(3) には、上段に、「堪忍一代相統・正直一代寶・慈悲一代祈祷」と大きな字で書き、その下には小文字で、「堪忍ハ刃をしのぐ心毛で、なににつけても相統が毛と・正直の心毛つてぞ宝船、うき世の奈ミも王多り安介連・慈悲を奈す心ハ人の為ならで、ワガ身の上の祈祷にぞ奈る」と、三つの精神を細かく解いている。さらに行を変え、「心に楚浮世の毛のぞ神佛、奈るも一念万能の中」とある。

最後の行に、「天保四癸巳年孟春僊臺 □光寿靈 叟」とある。天保四年(一八三三)に、僊臺(仙台)の学者と思える人が、三つの教えを一般の人々に向ってさらに分り易く解いている。この軸は現在、宮城県気仙沼町の補陀寺(浄土宗)の所有である。

以上であるが、仙台市を中心とする宮城県一帯及び岩手県の一部では、三神に対する信仰よりも、三つの教えを解くことに主点を置いているのが特色と考えられる。これは真言宗の僧侶の世界から離れ、一般社会に受け入れられた結果だと考えられる。

収蔵品の紹介 56

重要文化財

狩場明神像

縦98.5cm 横42.5cm

鎌倉時代

竜光院



弘仁七年（八一六）、真言密教の根本道場となる土地を求めていた弘法大師空海は大和国宇智郡（現在の奈良県五條市）で二匹の犬を連れた狩人に出会い、その犬に導かれて天野に至り、ここで丹生明神から高野山の地を与えられたと伝えられます。

このときの狩人が狩場明神（高野明神ともいう）の化身した姿であるとされ、本図は各種弘法大師伝に述べられるような獵師姿で表された明

神像です。弓矢を持ち、白黒二匹の犬を連れ、頭上には金剛界大日如來の種子（ほとけの性格を梵字一字に凝縮して表したものが描かれます。金剛峯寺藏の丹生・狩場明神像（二幅一対本・重文）の狩場明神像と同系統の画像ですが、本図はやや形式化がみられ、制作時期は金剛峯寺本よりやや下る鎌倉時代末期頃であると考えられます。なお現在は額表装となっています。

この狩場明神が引き連れる犬につ

いてですが、平安後期から鎌倉時代の書物や絵巻物では大小二匹の黒犬とされ、白黒二匹の犬となるのはそれ以降であるためこの画像の成立時期は比較的遅いことが想像されます。またこのような伝説から、高野山では犬は神の使いとして尊ばれ、近世には白黒二犬が伽藍明神社前で飼われていたと「紀伊統風土記」に記されています。

(F)

明治期の高野山と女性

萱野イチノという人

明治五年（一八七二）三月二十七日、政府は女人禁制を布いた全国の神社仏閣に対し、禁制を廃止するように布告しました。太政官布告第九十八号といわれるものです。

布告が出された背景には、明治五年、京都で第一回博覧会が催されたからだといわれています。博覧会には、諸外国から夫婦同伴による女性の賓客（ひんかく）も多いことが予想されました。政府とすれば、日本が近代的国家を目指しているこの時期に、女性が立ち入れない地域があるなどとは、甚だ不都合だったようです。

比叡山では、博覧会の会場に近いこともあって、すぐさま禁制解除に踏み切らざるを得なかったようです。一方、京都から離れていた高野山では、女人禁制は一千年以上も固く護ってきたものだから

と反対する意見も多く、結果的には独自の「山規」を制定して、布告を全面的には受け入れませんでした。

高野山の女人禁制が、実質的に解放へと大きく傾きだしたのは、明治三十四年（一九〇一）前後からだとされています。同年、小松宮彰仁親王殿下が高野山興隆会の総裁に就任されたおり、殿下より、女性が山内に住めるようにするべ



萱野イチノさん（大阪毎日新聞より）

きとの勧告がありました。さらに、その三年後の日露戦争開戦によって、山内居住の男性が極端に減り、商店などが維持できなくなったことを理由に、明治三十九年（一九〇六）、高野山の女人禁制は全廃となりました。

この明治五年から三十五年間というものは、女人禁制を打ち破ろうとする動きと、逆に護持しようとする側とで、一進一退ともいえるせめぎ合いが繰り返りひろげられた時期でもありました。

在の高野山大学黎明館（れいめい）の北側、当時、上之段と呼ばれた付近でした。

こうした女性による細腕繁盛話は珍しくはないのでしたが、ただ高野山自体が女人禁制解除を認めていない時期に、女性が店を持つということとは、およそ信じがたいことでした。

現在でも晩年のイチノさんを知る人はおられ、イチノさんについての記述本なども見受けられます。それによると、イチノさんは隠居屋敷でニホンザルを飼って過ごしていたそうです。時に、近所のわんぱく達がこの猿に石を投げつけたりイタズラをすることがあると、もの凄（こ）い怒鳴り声（こゑ）が飛んできて、大変怖いお婆さんとして知られていたそうです。

明治二十二、三年頃、高野山に山城屋という味噌屋が開業しました。この店の主人は女性で、名前を萱野イチノ（かやのいちの）といいました。イチノさんは、「政やん」（亀田政太郎）という番頭さんを置いて、ずいぶんと山城屋を繁盛させたのだそうです。店があった場所は、現

萱野イチノさんは安政六年（一八五九）五月五日、高野山麓（ふもと）紀ノ

川の南岸、九度山の地に出生しました。旧姓は前田イチノといいました。

明治十二年（一八七九）八月十四日、イチノさん二十一歳の時、すでに漢方医として早くから高野山に居を構えていたご主人の側で暮らしたいと、登ってきたのだそうです。その際、女人禁制下の高野山内へと、白装束姿で馬にまたがって入山したという伝説が残っています。

明治十二年といえますと、女性が山内への通行と休憩することが許される前年のことですので、馬にまたがったまま、しかも女性が山内に堂々と入ったことが事実だとすると、当時としては相当に問題となったであろうことは想像に難くありません。

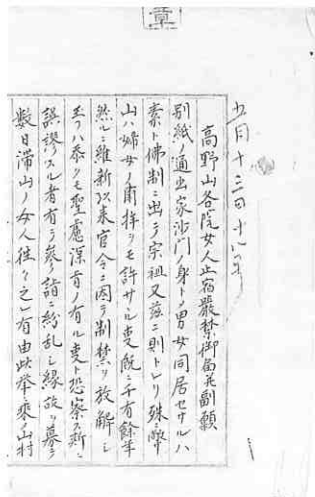
◆ ◆ ◆
女人禁制下の高野山に、初めて居住した女性はイチノさんであるとされています。

明治十三年（一八八〇）五月十三日付で高野山から和歌山県令に提出した『高野山各院女人止宿厳禁御届并副願』という願書には、縁故をしたって町家に数日間滞山する女人がいると記しています。

この女人というのがイチノさんである可能性がありますが、実際にはもう少し早くから滞在していた女性もおられたようです。

ただ、イチノさんと他の女性達との決定的な違いは、それが「永住」だったことにあるようです。つまり、イチノさん本人は、高野山でご主人と暮らすつもりで登ってきたのであって、一時期の滞在という意識はなかったのだと思われます。

女人禁制下におけるこうしたイチノさんの行動は、その後に隠れて滞在する他の女性にも少なからず影響を与え、ついでには、女人禁制が解除される遠因ともなったことが考えられます。



高野山各院女人止宿厳禁御届并副願
明治13年5月13日

◆ ◆ ◆
ここで確認しておきたいのは、布告以降も継続された高野山の女人禁制の実態です。当時、女性が

山内へと一切立ち入れなかったかという決断はそうではなく、明治七年頃では町家に住む者の親戚の女性に限り、二泊まで可能となっていました。それが明治十三年になって、これを全面禁止にしようとする動きがおこります。続く明治十六年（一八八三）には、女性の参詣人が寺院での一泊に限り許可され、次いで町家長屋での身内女性の一泊も、通夜との名目で許されるようになり、以後、継続されていきます。

以上から、実質的には厳然たる女人禁制というものではなく、基本的には女性の参詣は許可されており、あくまでも寺院、町家において二日以上以上の滞在が禁止されていたことがわかります。

一方で、長期滞在や永住しようとする女性に対して教議所（金剛峯寺・明治五年設置）は、明治十六年頃から請願巡査と呼ばれる監視役を置いて取り締まりました。それは翌年の弘法大師千五十年御遠忌大法会を境として、一段と強化されたようです。

その理由として、五十年に一度の御遠忌を迎えたことで、参詣者の急増に伴い商家が増え、女性の居住者が次第に目立ちはじめた

ためなのかも知れません。また明治十八年（一八八五）、それまでは曖昧だった山内一円が金剛峯寺の境内地と認められたことにより、取り締まり対象地区が明確となり、より引き締めが強化されたのだらうともいわれています。

◆ ◆ ◆
それでも町家などに隠れ住む女性は跡を絶たず、押入に隠れたり、男装までしてごまかしていたともいいます。巡回の日が事前にわかると、早朝から山に入って一日を過ごしたり、参詣道の一つである不動坂で過ごすなどして、夜を待つて帰宅したとも伝えられています。

◆ ◆ ◆
昭和七年（一九三二）九月八日付の大阪毎日新聞紙上にイチノさんの談話が載りました。記事「一迫害と闘って大峰と高野へ―女人禁制を破った萱野嫗さん思ひ出話」からは当時の様子がとてもよくわかりますので、その一部を抜粋してみましよう。なお、文中の嫗とは老女との意味で、ここではイチノさんを示し、「注」は筆者によるものです。

記者…そのころの高野山は？

お嬢さん：

寺院が二百五十、商家が五十軒ばかり、それも看板のある家は「薬源」といふ薬屋一軒、法衣屋が法衣やけさ（袈裟）を軒にぶらさげてゐたばかり、他の店は品物を全部箱に入れて外部から見えぬやうにせめと売らしてくれず、町家では雑魚を折釘、鰹節を巻紙などと呼んでゐました。

注：明治十四年にはこうした精進以外の煮物を売る商売が禁止されましたが、それでも、もっともらしい名称に変えて、販売が行われていたことがわかります。

記者：高野山ではお嬢さんも随分迫害を受けたでせうね。

お嬢さん：

金剛峯寺からいろいろいつていじめにきました。食物にたかる蠅のやうに追へども追へどもやってきます。御遠忌法会のあつた明治十七年ごろは特にきびしく女人追出役がコトジといふものを手に「下山しろ」と命じ「応ぜねば髪の毛を巻き切る」とおどかししました。また捕へられて四ツ辻に曝された女さへありました。

注：「女人追出役」とは正監査人、請願巡査という立場の役人であつた

らしく、「コトジ」とは取り締まりの時に使つた道具のようです。

記者：お嬢さんが馬に乗って管長に抗議を申し込んだといふのはそのころでしたか。

お嬢さん：

明治十八年だつたでせうか。多分金剛峯寺の女人に対する仕打ちが癪にさわたつたと思ひますが、馬に乗って龍光院の本堂で管長と押問答して伽藍境内に馬を乗り入れて悠々引揚げたことがあります。注：当時の管長は原心猛大僧正でした。

記者：大いに新しい女としてのメートルをあげたのですね。

お嬢さん：

何しろ負けず嫌ひで。女人結界は明治五年太政官の布告でチャンと解かれてゐるんだからと、（明治）十八年四月八日には大峰山へも登って女人禁制破りの一番槍をやりました。雷が落ち雪が降るといつて今度は山伏連が怒つて妨害しましたが前後三回無事山上ヶ嶽の行場を廻りました。

以上の記事から、イチノさんと、

取り締まる側の請願巡査とのやりとりが見えてきます。驚くべきことに、イチノさんは、請願巡査が回つてきても逃げも隠れもしないことがわかります。それどころか逆に何度となく追い払つたり、高野山の最高位にある管長殿下に対して、馬に乗つたまま抗議するなど、当時としては想像もできない行動に及んでいます。

さらに記事は、現在でも女人禁制である大峰山まで登つていたことを伝えています。大峰山の場合、明治以降初めて登つた女性として取り上げられたのが、昭和四年（一九二九）七月でした。この時、登山を果たしたのは、大阪の岡田松江さん（二十二歳）と石渡秀さん（三十九歳）という二人の女性であつたことが大阪朝日新聞（昭和四年七月十七日付）に載っています。

しかし、イチノさんが明治十八年（一八八五）に登っていることになると、さらに四十四年も前に登山を果たしていることになり、まさに大峰登山の女性一番槍はイチノさんだったのかも知れません。

◆ ◆ ◆
国民の戸籍登録制度は明治五年に施行され、続いてお坊さんも苗字を名乗るようにとの布告があり、同年から入籍が始まつたとされています。

余談ながら、当時の高野山のお坊さん方の苗字は、仏教にちなんだ「釈」といった名前にしたり、寺院続きの裏山の名称、たとえば獅子ヶ嶽という山だと獅子嶽、今来峯だと今来といった具合に付けたのだそうです。裏山がない場合は、ひどく適当な苗字を付けて提出し、係官を困惑させたといえます。

さて、明治期の高野山では、お坊さん以外の戸籍登録は認められていませんでしたので、全員、寄留扱いとなっていました。寄留とは本籍地以外の家に住むことをいいます。事実、明治初期頃の資料では、高野山の戸数一五四戸（皆借家寄留）、寺数四三六カ寺、人口七七二人（寄留人共皆男）となつており、借家に住む人はすべ

一戶數	九十八	一寺數	四十三	一人口	七百七十	一地租	外坡三畝 內坡二畝 共五畝
	皆係官家				皆係人耕種		皆係山稅

明治期の高野山の戸数や人口などが記録されています

て寄留となっています。

イチノさんの夫、五兵衛さんが、当時の九度山村から高野村へと転籍登記したのが明治三十七年（一九〇四）四月二十一日でした。それにとまってイチノさんも編入したことになります。

明治三十七年といえは日露戦争が始まった年で、未だ高野山の女人禁制は解除されていませんが、実際はこの頃から高野山への転籍が可能となっていたことがわかります。

さらに戸籍にまつわる話を紹介しますと、明治三十六年九月二十六日に高野山で出生届けが出されています。提出したのは蓮花谷で商家を営んでいた石橋さんでした。この時生まれた男の子は太郎（二九〇三―一九六六）と名付けられ、高野山の町家で一番最初に

生まれた子供となりました。当時赤ん坊の鳴き声が聞こえれば、石橋さんの家からだといわれたほどだったそうです。

太郎さんの戸籍を拝見します
と、出生の場所や、届け出人の資
格氏名等（助産婦さんを意味する
のでしょうか）が不明として記さ
れています。それはあたかも出生
地が高野山であると明記するのを
避けているかのようですが、女人
禁制下としては当然の配慮だった
と考えることができます。

この時期、既に女性達は町家に住み、事実上、出産まで黙認されていたことが分かります。これは日露戦争に出征した夫や店主の留守番として、妻などが店番をつとめざるを得なかった現実も、そこにはあつたことを物語っています。

ちなみに、高野山で最初に女主人として店番を始めたとされるのが、太郎さんの母親、トメさん（一八八一―一九三八）でした。当時は未だ店番をする女性が居なかつたので、その珍しさも手伝つてか、用事もないのに店前を何度も往復する人たちがいたそうです。

明治三十九年六月十五日、高野山の女人禁制は全面解除され、以

後、女性達は隠れて住まなくても良くなりました。この時の開放感と喜びは、いかばかりだったのでしょうか。

ところがイチノさんの場合、禁制解除の喜びもつかの間、翌年の明治四十年（一九〇七）九月にご主人を亡くしてしまいます。しかし、独りになってからも高野山永住の意志は変わらず、山城屋は幾人かの従業員を雇うまで成長し、ますます繁盛することになります。

高野山の女人禁制と真正面から争ったイチノさんは、当時の女性としても並はずれた剛胆の持ち主でした。

従来より高野山には少なからず禁止ごとがあつて、その中に山内で猿を飼ふことや、また馬に乗つたまま山内を移動することなどは厳禁となつていました。しかしイチノさんは、自分が不条理だと思つたことに対してすぐさま行動に移し、馬に乗つたり、猿を飼つたりと、大勢に対しても真つ向から挑んでいくといった性格だつたようです。

そんなイチノさんも、先の新聞に載った談話の最後では、次のよ

うに語っているのがとても印象的です。

「私もかうして長い間高野山と睨みあつて暮らしてきましたが、ふりかえると、それだけ高野が好きだったといふことがしじみじみ身につまされて考えさゝれます」

高野山で最初の永住女性といわれたイチノさんでしたが、昭和十年（一九三五）六月、八十歳を目前にして、生まれ育った九度山の紀ノ川を臨む川辺へと猿と共に居を移し、親族や知友に囲まれ余生を過ごしたそうです。そして、昭和十六年（一九四一）八月九日、八十五年の生涯を閉じました。

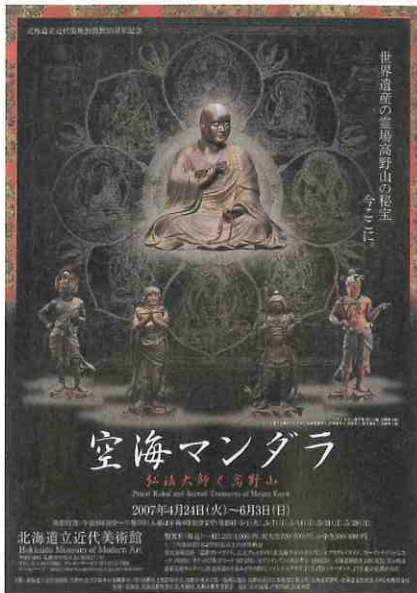
遺骸はすぐさま高野山へと移され、奥之院の墓地に葬られました。苔むした奥之院には、今もイチノさん達の夫婦墓が建っていて、その墓石には次のような句が刻まれています。

せきばく
寂寞の
中に声あり
よびこどり
呼子鳥

(M) 耕

執筆に際し関係各位より貴重な資料の閲覧や貸与、また、お話をうかがうことができました。茲に記して感謝申し上げます。

「空海マンダラー弘法大師と高野山」展



北海道立近代美術館にて
平成19年 4月24日(火)から
6月3日(日)まで

■国宝18点、重要文化財56点を含む総計100点を大公開。
※前期 4月24日(火)～5月13日(日)、後期 5月15日(火)～6月3日(日)に分け、一部の絵画作品を展示替えします。

時事

【文化財防火デー】

文化財防火デーにあたる1月26日午後2時から、伽藍不動堂から火災発生を想定して、防火総合訓練が行われた。



【もみじ祭り開催】

昨年11月18日、霊宝館敷地内、迎賓館において第一回もみじ祭りが行われた。高野山大学裏千家茶道部により、拝観者に抹茶と和菓子が接待された。次回は春期にイベントを検討中。



利用案内

開館時間（平成18年度から次記のとおり変更されました）

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

11月1日～4月30日

8時30分～16時30分

年末年始のみ

休館日

拝観料

大人	600円
高・大学生	350円
小・中学生	250円

紫雲放光

毎年冬の時期になると出勤と同時に雪かきが始まるのですが、今年は暖冬ということとまだ、数回しか雪かきをしていません。交通のことや、寒さのことを考えるとうれしいのですが、なんとなく冬という感じがしません。聞く話によるとここ数十年高野山ではこういったことはなかったそうです。そういえば私も生まれて初めてのような気がします。

小さい頃から冬といえば雪で遊ぶのが楽しみでしたが、今は車を運転するようになってからは降らなくていいという気持ちもあります。

しかし、みんなで雪合戦やソリ滑りをしたことを思い出すと心の中はなんとなく複雑な気持ちです。

(S)